特55
216

歌舞伎十八番之一

勸進帳

特55
216
W24716/23

當世流行
壽狂言
勝相撲
歌舞伎
大入賑
勧進帳
團十郎
菊五郎
長唄囃子連中
市村羽左衛門
義太夫

明治二十年四月かけまくもかしこき
三陛下時の外務大臣井上伯爵の邸に
御幸ありけるみぎり御覧の御慰にとて余をして
の俳優を率ゐさせて歌舞の技を演ぜし時に
ら勧進帳を演ぜしめさせ給ひしもとはかりなき
御いつくしき俳優共は以っていともかしこき
おもむきに聞えしかば之に東京は古来より
しるされて千代の餘譽とはまうし
志ありしも勤仕の始まりし余が家の面目何よりと
へ御覧ありて我もいと嬉しくよろこび
の後も家のため図らず候ふ由をも書し藝に
志をすゝめたる辭

九代目市川団十郎
堀越秀 謹識

明治二十三年五月日

本舞臺一面の置舞臺向ふ松の襖左右若竹の書起し正面常足の段
毛氈掛有り日覆より破風の摺込の天幕上の方切戸口下の方揚幕
都て本行好の通り飾り附宜敷序シヤギリにて幕明く

ト頭取出て元祖團十郎百九十年の壽として歌舞伎十八番の内
中絶したる勸進帳の狂言相勤めし口上宜敷あつて役人觸を讀こ
み爲口上左樣と上手へ這入る此内下手より長唄連中上下にて
出て來り段の上へ居並ぶ囃子連中侍烏帽子素袍にて出て來り
平舞臺へ居並ぶと笛のあしらひに成り下手より九藏梨子打
烏帽子素袍にて出て來る跡より菊四郎𠮷作箱猿たつ付軍
兵の形りにて附添出て來り

九藏 斯樣に候者は加賀の國の住人富樫の左衛門にて候扨も頼朝義經御中
不和と成りたまふにより判官殿主從作り山伏と成り陸奥へ下向の由鎌倉
殿聞し召及ばれ國々に新關を立て山伏をかたく詮議せよとの御嚴

命に依て其所を去る方々左右に別て散らん

菊四郎　ハツ仰のごとく此程も陣しげふる山伏を捕へ梟木に掛並べ置て立り升る

万作　随分物に心得我と云ふ拙き者も一山伏と云ふ者ならば活者へ引居中ゝ

第猿　後験者たる者来りふバ即座に縄掛打とるやう

菊　何れもけ〻ど

三人　殺ゝ升て立り升る

九　いゝ者こゝ中され立り於も山伏来りふバ謀事を以て捕るゝ中鎌倉

三人　殿の御心安んじゝ中ゝ中ゝ此義意度番所仕れ

ゝ中こまつてい　ト皆こゝの方に宜敷伺ふと次第に成り

旅の衣にすぐかけのこゝ霞々き袖や去ほるらん時も須も

如月の〻十日の夜月の都を立出て

ト三弦入り大小寄せふ向ふより国十郎強力姿の拵へ笛を背負

網代笠金剛杖を持出て来り宜敷花道へ留る

是やこの行も帰るも別ては知るも逢坂の山隠す

霞ぞ春いゆの〻ゝる波路を分る舟の海津の浦に着よりり

ト此内向ふより市花墨猿海猿赤猿いづれも山伏の拵へて兜巾

藤掛小サ刀数珠を持出て来る切より海老蔵好の拵へ弟数を持

出て来り文句以つぞいふ宜敷花道に留るコイヤイに成り

国十郎　以の〻ふ雑魔道ともゆでとく行先こゝに関所につてい通陸奥

迄ハ思ひも寄ぞ名もふき者ふ対れんより迄貴ゝ様ふ極めたれど

各〻の心もぞ〻難く弁慶ぞ初ふ随ひ強力といふ姿を替へり面こ

計らふ胸なりや

市花　されバハ帯せ〻たる刀ハ何の為以つの所ふ血をぬゝん君に大事の今ぞ所

黒猿　一身の臍をかゝあ軍所の番卒切倒し関を破つて越るぞ〻

海猿　多年の武恩ハ今日只今

赤猿　夫こそ望む所なれ以ぞや関所を

四人　踏破らん

海老蔵　ヤアレ暫く待給へ先程も申しまする是いかゝ様にまそれは関一ツ踏破て越たりとも行先この新羅御門なる沙汰の五月雨の事をもとめて破るの石程たゆきこの陸奥へ参り新羅一夫ゆゑふこそ兜中篠掛を退られ笛を五月雨ますゆゑ世者を強力ふ仕立ひ兎ふも角ふも其ふ五任せなつて五ゝすゝこの山伏ふも法の立を深くと召れ何れ中も召除る御弁

我こそ引さゞつて五通てひけ〳〵ふの人ハ思ひもよりゆゑ

なるこの沙汰ふ五出なつゝふずるふてハ

兎ふも角ふも弁慶計らひひ者く達背すべかゝ

四人　かゝこまつてムり外る

海老　さらば皆〳〵五通てひけ

四人　心得てムる

いざ通てんと旅衣関のこゝろとふ立のつゝる

ト是ふて跳ての石ふの者ふ成り皆〳〵本舞臺へ来る

海老　いのふ中ハ是ふある山伏の五案を五通る

ト卒子の三人こゝ一ツなつて

三人　ナニ山伏の四軍ふかゝりゝとは

九　何と山伏の五通りなるとゆゝう心得て居る

ト立て来り海老蔵と向ひ

海老　あゝ〳〵客僧達是ハ関ふてひ

九　承りひとれハ南都東大寺の建立の為ふ國〳〵客僧を巡ゝる北陸道を四客僧達りて五通る

海老　近頃殊勝ふハひ〳〵ども四新羅ハ山伏〳〵者ふ限り堅く通路ふりがゝ

九　心得ぬるゝどもふ〳〵シテを趣意ハ

海老　さんひ頼朝義経五中ふ不ふ成せゆゑ平たより判官殿ハ陸奥秀衡を新〳〵ゆひ作り山伏と成り下向ふる由ゆゝ召れ國〳〵形のゆく

新家を立て礼形けいど弱一基承る
山伏を論議せよとの事ゆえ我こそ番頭仕る
強ふ見れい大勢の山伏達
左人も面一中ゆ
三人　ゆり寄せ
海老　委細差りは夫い作り山伏こそ留めよと仰ぎ一藏の山伏を留
ものの作ていはもはなるまじ
蔵　イヤ昨日も山伏を三人を切こる上ハ
百　藏の山伏とそ用捨ハ
第　たつて通れバ一命ゆも
三人　及ぶべ
海老　和い切こる山伏首ハ判官殿ゆ
九　アラ恐づかしや問答せ差左人も通を事

三人　ゆり寄せ　ト上の方へ寄り九藏ゆ桶ふこり居る
海老　言語同断かこる不祥の事ハきやは上ハ力及ばず観念の為さらで
家期の勤を始め尋常ハ様せられるするゆそハ各こ近こ渡りハ
四人　ハ行て仏る
海老　イデく景期の勤をあきん
夫山伏といつた役の優婆塞の行義を受け即心即佛の
本體を表ゆて示留給ひん事明王の照覧計り難し無野權
現の法罰なこんゆ立ふふおいて疑ひなるべこず嗜なびら呼
けんと殊勝さらこと押もんどり
ト四人のつとゆて海老義左中ふ左右へ二人づ別れ出のり宜こく
なる九義思入なつて
ハ、近頃殊勝の法義形先ふ承りはるバ南都奈良大寺の勤法と伝なりしが
定めて勧進帳の法ふ持ふきゆハなこド勧進帳を遊べされハ

聽聞仕ん
何と勧進帳を授めとゝゆや
いのふも　　ト海老花思ハ為うて
心得ゆてゆ
元より勧進帳のなれいとそ笛の内より往来の巻物一巻
ゆり出し勧進帳と名付つゝ言ゝこのふこそ読上られ
ト笛の中より読への一巻を出し押戴て
夫つらく思んこそれば
ト九花立上り勧進帳を巻のごとく海老花又ゲドと四面を巻き
急度見
大恩教主の秋の月ハ涅槃の雲ふ隠れ生死長夜のふゞのき夢驚かん
べき人もなし一度ふ中頃の帝聖武皇帝とゆ奉り景愛の婦人ふわのれ
戀慕の情ゆみゞく涙泣のなんゞかまく時なし故ふ志やうぐぼさいの

若盧遮那佛を建立ゆふ給ふ焼亡一畢んぬかゞ
の霊場他ふんゆをまゞき俊乗坊源勅命を蒙て世ゆの全ん
もんふゆんゞを存上下の貴族を進めてかの霊場を再建せんと
諸國ふ勧進を一紙半銭奉財の輩ハ現世ゆて八年此の楽ふかとり
當来ゆて数千蓮花の上ふ遊せん恒命誓願敬白
天もゆゞけと僕こゆのゞけたり
いのふハ勧進帳聽聞の上ハ疑ひなくあゞ去ゆゞ事のついでふ
四ひゆ一さん世ふ佛徒の姿さゆ一たり中ふ山伏いつゆ一きゆて佛門
降りいゞかゝれゆ謂ゆふ
其来由と安一夫験験の法といつて台花堂剛の山都を立て一峰
山要所を踏開き世ふ害をなす悪獸毒蛇を退治して現世愛民の
慈愍をゝれのゝひハ難行苦行の功を積こ悪霊を魂を成佛ゆ祝
させ日月清明天下太平の祈禱を修を故ふ内ふて恩厚慈悲の

徳を物ゝ表に降魔の相を顕し惡鬼外道を威伏せり是釋佛の
面影ふ一て百八の珠數ふ佛菩の利益を顕す
シテ又袈裟衣を身ふまとひ佛徒の形ふたりまゝ頭ふ戴く兜巾ハいふふ
則兜巾條掛ハ武士の甲冑ふ等しく勝ふい弥陀の利劍を事ひまふハ
釋迦の金剛杖ゆて大地を突て踏ふき高山絶ふを縱横せり
寺僧ハ錫杖持へまふ山伏修驗の金剛杖ふ不佛を加ふ持ふ謂ふふと
支ふおろうゆ金剛杖ハ天竺檀特山の神人阿羅ゝ仙人の持ふひ一靈杖
ゆて台藏金剛の功德を現り釋尊未曙星沙弥とゆ一せ一時阿羅ゝ
仙ふ給仕一て苦行仕まひゆ功積り仙人を信力強勢を感一曙
星沙弥を改て聖普賢と名付たり
シテ又修驗ふ信ふ一ハ
阿羅ゝ仙より聖普ふ授る金剛杖ふ靈杖ふれハ我祖役の行者ハ
二持て山聖を修應一夫より世ゝふ是を傳ふ

九、海老

九、海老

九、海老

佛門ふのゝふゞゝ佩せ一太刀ハ只物おどさん料ふ
料ふるゆ
是ゞ案山ふの弓ふ等しゝおどし一ふ佩の料ふれど佛法王法の害せん
ふ可惡獸毒蛇ハいふふ及ゞゝたゝく人習ふれゞとて世をさまゝげ佛法
王法ふ敵せる惡徒ハ一殺多生の利ふ依て忽切て捨るふり
因ふとへぎり形ふる者ハ切ふゞきゞも一善形の陰鬼陽魔佛法
王法ふ障化をふきゞ何をもつて切りるふゆ
世ふ形の陰鬼陽魔ハ九字生ふを以て切断せん何の難きふゆたゝん
シテ山伏の出立ハ
則生ふ身を不動明王の容ふ一てどるふり
頭ふいゝゞく兜巾ハいふふ
それゞ五智の寶冠ゆて十二因緣のゝゞをとつて是を戴く

海老

九　九會曼荼羅のかきの篠掛

足ふまとひ〜そぐきい〜のふ

海老　台花蓮色のたぐきと者ゝ寸

九　叔又八ツのまゝんぞい

海老　八葉の蓮花を踏の心ゝり

九　出で〜ゝる息い

海老　阿呼の二字

九　抑九字の字てといゝの字義也ゝ

海老　九字い大ゝの深秘ふ〜て語り籠きゝ

況ゆ世ゝ〜〜夫九字の字言といつぞいたゆゝ練兵闘者皆陳列花

前の九字ゝり心ふ切らんとする時ハたゞ〜〜立て歯をたゝゝゝ三十

六度右の大指を以て先四縛を畫き後ふ五横を畫くゝ時急〜如律令と

呪する時ハ行〜ゆゝ五体鬼煩悩鬼すつゝ悪魔外道死魔生魔立ふ

ふ亡ぶゝ者ふ熱湯をそゝぐゞとゝ實ふ衆品の善門を切るの大利

劍莫耶ゞ劍も何ぞ者ゝん武門ふとゝて呪を切ば敵ふ勝ゝ疑ひ

ゝ此外ゝも降魔の法疑ひ行〜ば暴ふ應じて善〜ゆゝんを憑ゝ大

世ゝ者ゝり肝ふえゝり付人ふ語ゝふ行ふ〜〜〜〜〇大日本の神祇

佛菩薩も照覽行れ百神誓首おゝれ〜〜僧でゆゝと云ゝ形のゝり

九　かんしんしてぞ見ぶふふる

形ゝ者ゝ客僧を暫時も疑ひゆゝ世ゝ眼ゝ行て為ゝ者ゝ我ゝ

今ゝり京勅使の施ゝふ付んゝ番卒ゝ布施物持テ

三人　ハ、ア　ト卒ゝ三人上ゝ〜〜〜〜遣ハる

士卒ゝ運ぶ廣基ふ白綾袴一重加賀絹行ゝ〜〜ゝ右持ひ

沛前〜〜ゝそい直〜〜ゝ水

ト此内卒ゝ三人白木の基〜〜加賀絹を重ゝ同じく白綾袴地を

乗せ三寶〜〜服紗色の丸鏡袋入の砂金を乗せ持出る九花ふ

又世能ふく立ぐ置

九、はせ参ふいはんぐも東大寺建立の勧進則布施物に更弱下さるべ

それがーが功徳備み願ひ奉る

海志　なりがくき大旦那祝當二世安樂ぞ仏の疑ひなりぐかず重相て中

多のひ猶我こハ近國を勧進ー卯月半ふ登るべーー夫とい重高の思ふ石

願けやー鏡一面砂ぐ宝一包更弱殺生〇いこふ事こは通りなれイデ

く急ぎやーー

四、人　行やーてい

こい嬉ーーやと山伏も去づく立て歩れけり

ト海志花先ふ四人付き合ひかる国十郎ぜより好ふかるけ時

菊四郎九郎ふ呼くなり宜ーーく九郎四人なりて

九、海志　いふ是成強力とまりいへ　ト是ふて皆く急度思へ

コリヤなりまて事を去そんぞふ〇

九、海志　寸いや我君怪ーもるハ一期のぞちんこそありと者こ行ぐ立場る

ト此間海志花ッカくと舞臺ふ来り国十郎ふ向ひ

コナ強力めなりて通りあるぬぞ

九、海志　なれいこふたより冨あやー

それハなのゆ思ひ冨ひ

九、海志　アノ強力ガチトハふ似ると中者のひ様ふ扱こそ呉ず冨ぬり

なりとハふ似ると中者のひ様ふ扱ぬ雅ふ似てひぞ

九、海志　判官殿ふ似ると中者のひ様ふ扱こそ呉ず冨ぬり

言傳回郎判官殿ふ似る強力めハ一弱の思ひ出ふエ、腹立ち日言ふハ

強力の国ふ越ふぞると思ふ事ふて行ふさがれば

こそ人ふ怪ーもれ無ーてけ程ふり中もまれば判官殿ふと怪めらるハ

こが仕業のまこのふまゆ思ふりムハ思ハふつーーヤ嬉しくイデものぞ〇

金剛杖をあつとろてさんぐふてうちゆくす

ト海老蔵堂男杖みて国十郎をおろす軍ーくなつて
通りおろす
通れとこそいのくーー星女
いのゆうふちんそるとも通すろ
九
三人　すりうすゆ　ト是みて四人立つてるを
海老　コリヤ○　ト押へるみ義卒ろ三人とも是を見て立かくるを留て
かくぐいの伊ゆるふかるど職ーき強力を太刀のくるを抜まふ
い目れ良の振義おくぐゆりの立りとは山伏いお刀抜のけて
勇ミかくれるなりさまいいのふ美麗鬼神も恐きつぐうぞるくふる
ト此間海老蔵双方を留るゆ宜敷なつて急度見ゆる
すぐけんゆるは疑ひのゆうぐ強力め義施の布施もろともふは頼けゆ
以ゆゆうとも仇明みされい伊ーー是みて斬ーゆさんや
コハ先達のなるけゆ
九

海老　然らば只今疑ひなりーいいふ
九　士卒の者が我への所へ
海老　ロ疑念時ーー斬ーー見ゆゆさんや
九　たゆすりるふふ歩卒共のすーふまふ目より判官殿ふるふき人を
疑へいどそ形折機も仕ふふりゆ疑ひ時ふ引くいるふび通てしよ
海老　大旦那の伝ふーずい斬ーーゆ捨んもの命冥加ふ叶ひゆつ口辰を
急度心得おろふ
九　我い是より形もきびーくけいごの役目方々事れ
三人　ハアヽ
士卒を引連冥ゆるい門の回へぞへふける
ト九義先ふ三人付て上の方へ立へると合方ここ毎ふ腰りゆの寸より
海老蔵国十郎の手をとりて上堂へ立ーうやまふ
国　教も今日の様相更ふ九恵の及ぶふなるず生涯限りなる後ふ鬼角

市

の是非を不問答して只下人のみくさんぐみ我を打て助けよ西ふ
天の加護有矢正八幡の祝宮と思へば恭く思ふべき也
世帯隆房を始として恐ふ者共も冥官ふ呼留れ水を掛ハてぞ
君の御大事と思ひ〳〵ふ

逗

誠ふ源氏を名乗る正八幡の義経公を守り世まふ以下の顯れ上ハ
隆奥下向いすみゆゑ多るべ〳〵

海

全く是ハ武士花坊の者謀ふ行〳〵ぞんぬ亡ぬ〳〵

赤

多の〳〵我〳〵ぐ及ぶ所ふ行〳〵ぞハ〳〵

四人

おどろきいつてムる

海志

夫世ハ末世ふ及ぶといえども日月いまぞ地蔵ふ以ぶ厚運なりがく
しさいハ計略と申也西〳〵主君を打杖のそら恐ろ〳〵ふ行
をもなげる其腕も恐ぶるべきと覚ひアラ恐ろ〳〵ふ
涙ひふ泣ぬ雑慶も一刻の涙ぞ縁あり判官ハ涙を流ひ

ト皆〳〵直参うきひの思ハ

国

いのちハれば義経ハ弓馬の家ふ生れ来て命を兄弟ふ捧ぐ板
を西海の波ふ志づめ

海志

山野海岸ふ起て武士の
鎧ふ添ひ〳〵袖枕かく〳〵ふ波の上なる時ハ舟ふう
こび風波ふ方をすのぜ又或時ハ山脊の馬蹄もまく雪の中
ふ海ふ〳〵なり夕浪の立〳〵音也須磨の石と砕く三ヶ所
の程も多〳〵ふ〳〵やと思ハれ〳〵〳〵見なぎみ家ふ
居置く計りなり

ト大ふ入りふ海志義物語り申の振り宮〳〵なりて弱る

四人

退宮

互ひふ袖を引連れていぞ〳〵世ふひの打こうふ

ト海志義先ふ皆〳〵立上り打ふ成時下手より家臣三家ふ

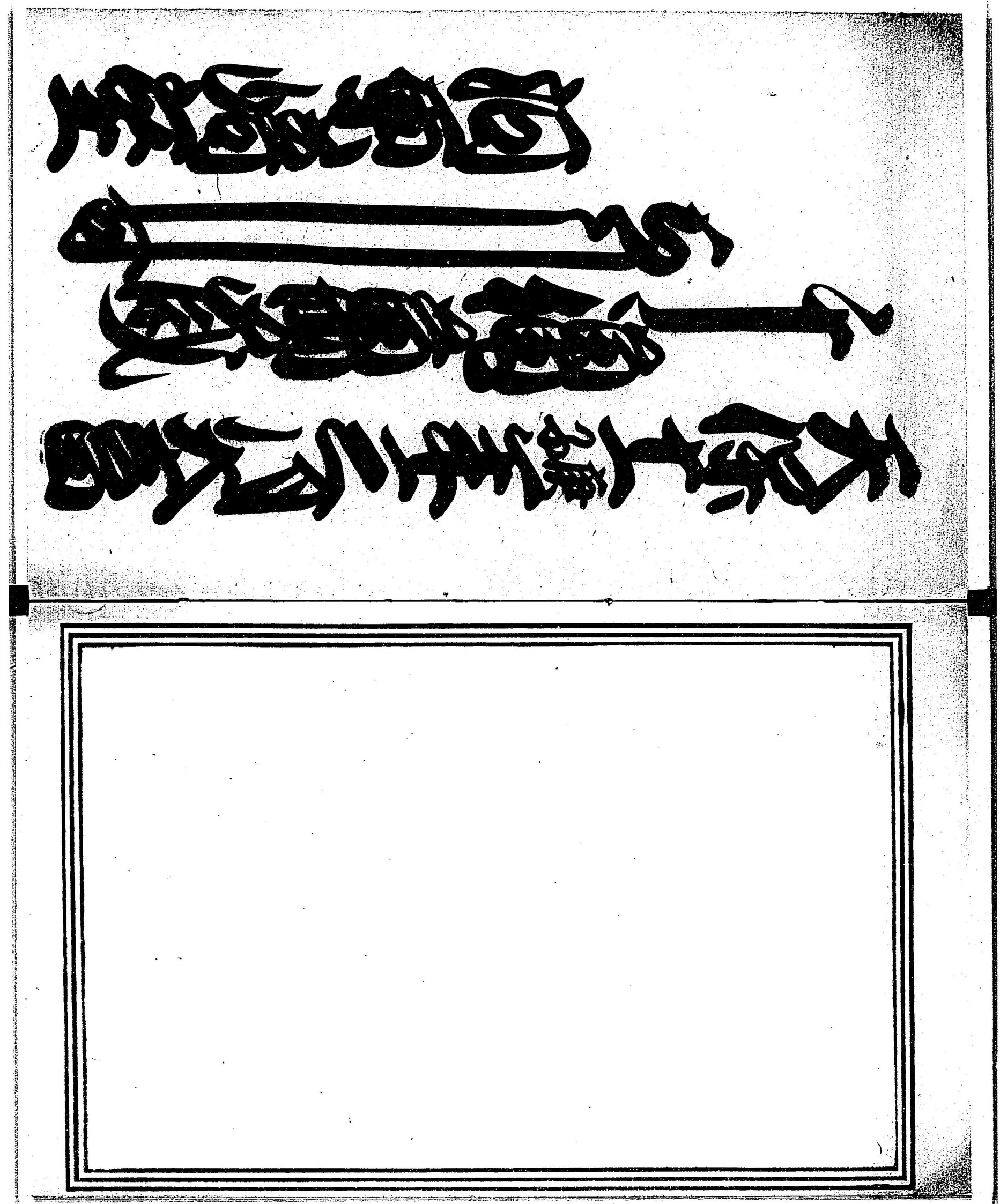
土器を棄せ是を拾箇四四方位顆華の吸筒を拾ひ出て来り
拾ひ出て来り

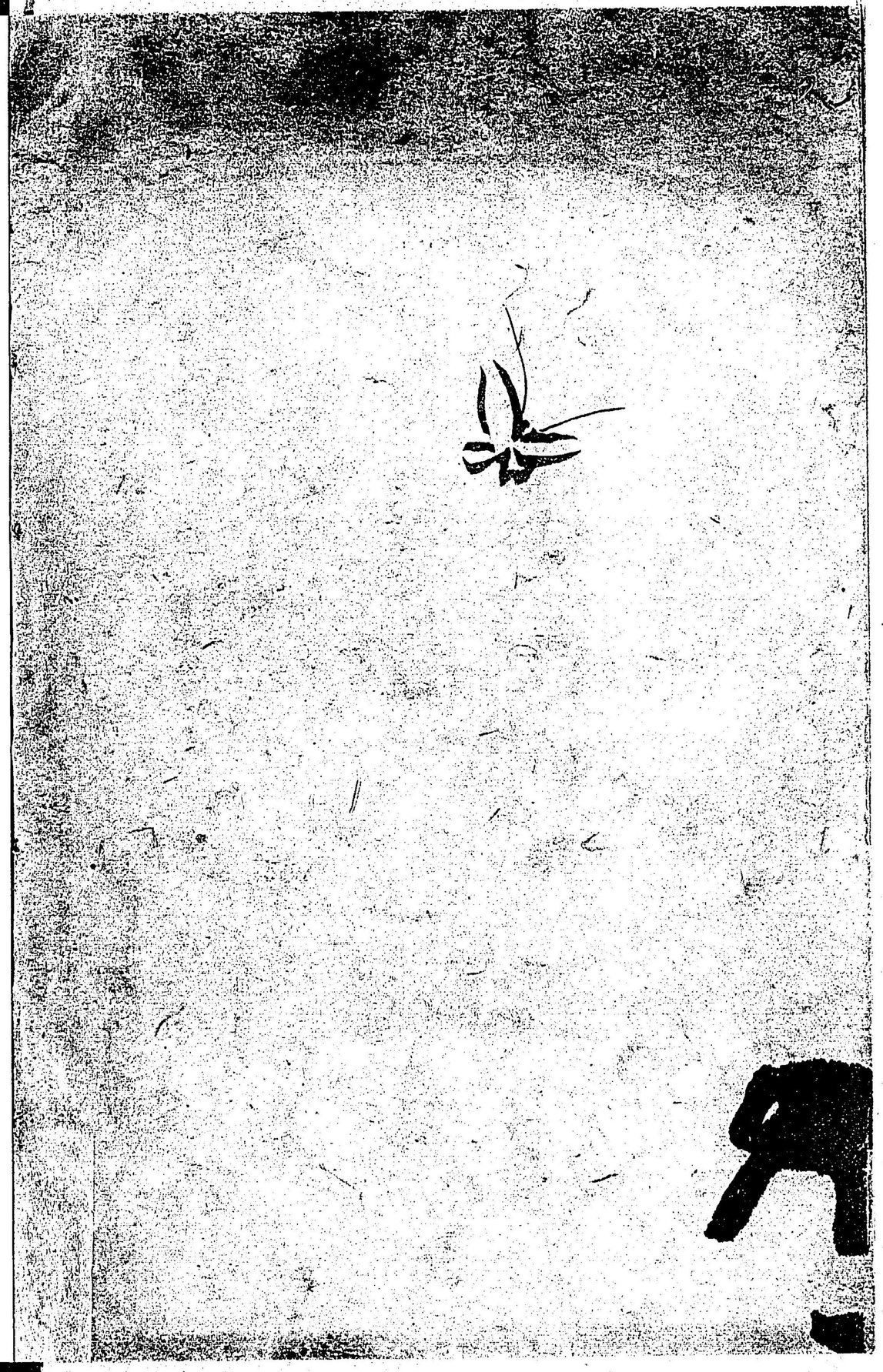
客僧達おもしろ〳〵 ○ トこれみて皆〳〵人替り宜敷仕ム
扨も其山伏達ハ御ハを中餘りハ面目もなくあぢく盛酒をキツ
進んと拾ハ来せりイデ〳〵盃ますまゝ〳〵せん
ト土器をとりたのげる等他酌をする九郎太夫海老蔵〳〵寄
たりがこの大旦那ハ馳走ちゆゝぶい仕ん
實ハ〳〵是も心得ちり人の情の盃を受て心を留めとの也
ト盃を受宜〳〵たりて
今い昔の語り草たゝ〳〵もづゝ〳〵の我心一度まこと〳〵あ〳〵
ホさく迷ひの底の奚越て今又爰ハ越かゆる人目の華の
ゆるせるやア、惜られぬ如こそ浮世ハれ
ト中間箇四郎方他をおそ盃をすたりてかつ〳〵桶の蓋をかり

寄人の目の酒をのこ〳〵ずつぐ〳〵と呑酒ハ碎〳〵る思ハ
面白や山水ハ〳〵盃を浮べてハ流ハ流ハ〳〵曲水のまづ
さく〳〵ぎる袖ハ〳〵ぬれていざや舞を舞ハよ
ト中間大ハ〳〵宜敷振りたりて三弦入り男喜ハ〳〵り本行の
奇ハ〳〵ゆるよろ〳〵くたりて
先達お前ハ〳〵ありては
先達一トさ〳〵ハ舞ハへ
元より辯慶い三塔の遊僧舞延年の時の和歌
ト中間振りたりて奇の二段目ハ〳〵ゆる
これゆる山水の流ていたるハ〳〵ぐ〳〵こそ鳴い滝の水〳〵
ト此間ちりたりて舞の三段目ハ〳〵ゆる
鳴い滝の水見ハ興ともたくぞとちりとく〳〵立たつゝ
の心ゆるすハ〳〵奚ゆるの人〳〵いとまゝてさゝべとて笛をあつ

ゑり肩ふあつのけ
ト大ふ片シヤギリふ成り海老蔵振りの西ふ落こみ打ちとつて異文
長ふ少て図十郎先ふ四人付向之通のる海老蔵笛を背負ひ
金剛杖を持ち九蔵ふ表ぎーて立よる
虎の尾をふこ毒蛇の口を遁れ行くる忠地ーて陸奥の國
へぞうでりける
ト宜敷海老蔵花道へ行舞墓ハ九蔵幸ふ三人見送る
よ吸ーて
幕
ト打込カケリふ成り海老蔵ふて通のる拍シヤギリ

明治二拾三歳七月一日印刷
仝　七月二日出版
定價金壱拾錢
著作者　故　市川海老藏
市川海老藏相續人
東京府平民
發行者　堀越秀
東京市京橋區築地二町目廿三番地
版權登録
版權及興行權所有者　東京府平民　堀越實
東京市京橋區築地二丁目廿三番地
堀越秀長女
印刷者　東京府平民　大谷金吉
東京市京橋區木挽町壱丁目拾一番地





特55
216

歌舞伎十
八番之一　勧進帳

国立国会図書館

074798−000−1

特55−216

歌舞伎十八番之一勧進帳

市川　海老蔵／著

M23

CEK−0111